

月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



第10号

海文堂書店 1982・11[10]

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10
(電) [redacted]

目次

次

神戸の鳥	坂根 干	2
「人間らしさ」について	浅田修一	6
ヨロラドスプリングスの詩人	海老原 明美	10
むかしなんにもせん長	林 喜芳	13
神戸野球物語〔Ⅲ〕	棚田真輔	16
ぶっく・えんど		20
郷土誌の窓		22
海文堂案内版		26

神戸の鳥

坂根千

神戸アルプス背^{せな}に見る

史跡に薫る雪の御所

大楠公もしのばる

湊川原の古戦場

ここぞ我等の運動場

晴れたる空の朝日かけ

いざわが友ようちつれて

愉快に今日も遊ばまし



ツキノワグマを筆頭に哺乳類や鳥類が飼育されていて、これが田役を買ったのか、付近に格別小鳥が多かったことを憶えている。現今と比較すると鳥取県境の戸倉峠、丹波の大江山、丹後の宮津などが日帰りコースとなつた

行動圏の増大という点に於て隔世の感があり、鳥類については種類数の変化は少ないが、個体数の減少において隔世の感がある。個体数の減少した種類は、繁殖、採餌、隠れ家等を大樹に求めるブッポウソウ、アオゲラ、アカゲラ、アオバズク、フクロウ、サンバ、或はアカマツなどの疏林に営巣するヨタカなどの減少が目立つこの頃である。しかし個体数の減少はあるものの四季に応じてホ

オジロ科のホオジロ、ミヤマホオジロ、アオジ、カシラダカ、クロジ、アトリ科のアトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、イカル、シメ、ヒタキ科のオオルリ、エゾビタキ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、ウグイス、ヤブサメ、トラソグミ、シロハラ、ツグミ、ルリビタキ、ジョウビタキ、メジロ科のメジロ、カラス科のカケスなどは今でも容易に目撃しうるし、また神戸背山における近年の調査ではヒヨドリ、ホオジロ、ウグイス

に或は野外に知識を求める子供達に、手頃な距離にある野外教育園としての場を提供していた。

山上から眺める風景は大阪湾が大きく拡がり、山と町と海が美しく調和し且つ海がゆとりのある空間としての十分な効用を市民に与えてくれていた。

その頃この山々を鳥や蝶、甲虫を求めて歩いた私の行動圏は、早朝からの半日行程では高取山、高尾山、小部峠、菊水山であり、終日コースでは摩耶山、再度山、大竜寺付近、布引谷、川村、鉄柵山などであった。当時まだ神有電車はなく、神戸市電も東は上筒井、西は長田車庫までであった。須磨や石屋川まで延長されたのはずっと後のことである。

鳥類が特に豊富だったのは多井ヶ畑、高取山麓、鳥原水源池、西小部、白川村、再度山大竜寺付近、布引谷、青谷などで、主としてハト科、ホトトギス科、ヨタカ科、カワセミ科、キツツキ科、ヒヨドリ科、ヒタキ科（ツグミ亞科、ウグイス亞科、ヒタキ亞科）、エナガ科、シジユウカラ科、メジロ科、ホオジロ科、アトリ科などの鳥類百種近くを算えたものである。ことに鳥原水源池から菊水山に至る途中に好事家の經營する小動物園があり、

などが最優越種としてその名を連ねているが、この傾向は今も當時も殆ど変らない。

平相国が一代の豪華にきずく経が島
福原京のいにしえも和田の泊りは賑はえり
奮え 奮え 神戸市民

大楠公が往年の 苦戦の跡は湊川
流れの末は変れども 英靈今もいます如く
奮え 奮え 神戸市民

西の海より東より武庫の港の朝夕に

波と寄せくる新汐^{にいお}は力に満ちてみなぎれり
奮え 奮え 神戸市民

神戸港は古くは和田の泊り、武庫の港、近くは兵庫の港などと呼ばれ、時代に応じて極要な地位を占めてきたが、その港を訪れる主な鳥類はシギチドリ類、カモモ類とトビとである。シギチドリ類は海岸や干潟に多く集ま

るが、港湾施設の整うにつれて減少し防潮堤に憩う姿を稀に見る程度となる。カモメ類とトビは何れも魚の陸揚げされる港や有機物の多い河口部などに餌を求めて集まる。

カモメ類はチドリ目カモメ科の鳥である。カモメ属とアシサシ属とがあり、ここに秋冬季普通に見られるのはカモメ属のウミネコ、ユリカモメ、カモメ、セグロカモメであり、春、夏に姿を見せるのはアジサシとコアジサシである。中突堤、メリケン波止場、一突あたりにはカモメ類が多かったが、今もユリカモメの姿が多い。ちなみに、大阪湾を訪れるカモメ類中ユリカモメは最も多く約六四%、次いでウミネコが三五%を占めている。ユーラシア大陸中緯度地方一帯に広く繁殖地をもつユリカモメの個体数が、日本の周辺僅かの小さな島々にしか繁殖地をもたないウミネコより優越性を保っていることは当然のことであるのかも知れない。カモメ、セグロカモメは極く少数である。

アジサシは樺太、千島以北で繁殖するために北上する途中、休息、採餌のため立寄るものである。コアジサシ

須磨の浦には美しい白砂青松が残っていてコアジサシ、シロチドリ、コチドリなどの姿が見られたし、秋冬季にはシロチドリ、ハマシギなどの群飛がよく見られた。殊に淡路島を背景に夕日を浴びて群飛する姿はまた格別の風情を残していた。

淡路島かよう千鳥のなく声に

幾夜ねざめぬ須磨の閑守

源 兼昌

京から派遣されて須磨の閑守になつた人の都を離れた寂しさと、淡路島を向うに眺めた美しい風景ではあるがあまりにも静かすぎる風物と、耳に入る哀愁を帶びた千鳥の声とに、ただただ都恋しの物思いをうたつものであろう。とにかく哀愁を帶びた声ではある。人家の少なかつた須磨の海岸を思い浮べてみられるとよい。おそらく砂浜はもっと広かつただろう。白砂青松は延々と西へ続いていただろか、閑守がきいた千鳥の声は秋だったろうか、冬だったろうか、などと思ひめぐらせるのも楽しいものである。

須磨の閑守がきいたのはシロチドリの声だったろうと考えることもできるし、ハマシギだったろうと考えること

は繁殖のため四一九月の間に渡来し海岸、河畔に営巣する。須磨の浦や脇浜、敏馬の海岸ではシロチドリとともに砂浜で営巣するコアジサシが見られたが、現在その営巣地はない。年々に進行する埋立工事の空地を利用して僅かに露命をつないでいる現状にある。コアジサシは水面三一五米の上空に停飛して水中の魚を狙い、狙いが定まるとき逆様に飛び込んで捕える。この勇壮な姿を見る機会は多い。水の屈折率を考えて誤らない技術には心させられるが、美しい水辺の風物詩の一つである。

神戸を出航する船舶の食糧として鳥肉を扱う店が南京町にあつた。鳥勝（のち柴田屋）といい、カモ類とスズメが中心であったが狩猟期には種々の鳥が各地から集められてきた。中学生の頃から折々に訪れて勉強させてもらったもので、随分めずらしい種も手に持つことができ、殊に当時としても野外観察の困難だったマガノ、ヒシクイ、カリガネ、ホオジロガモ、ビロードキンクロ、ヘラサギなど感激の目をもってながめたものである。

ともできる。何れも秋冬季大阪湾には個体数も多く、シギドリ類のうちではこの両者で百分近い圧倒的多数を占め、且つ年間を通じての個体数は両者相半ばしているからである。

一方閑守としてはこれがハマシギだろうとシロチドリであろうと格別のことではなく、哀愁を帶びた声で鳴き交しながら飛び交う百々千鳥ももちどりを指していたのかも知れない。ハマシギだ、シロチドリだと論ずることではなさそうである。

「人間らしさ」について

浅田修一

編集部から与えられた題は「『人間らしさ』について」というのである。私は途方に暮れた。時・所を問わず、とにかく人間の示すあらゆるありよう、「人間らしさ」はある、とも言えそうである。どこからでも接近可能といふこのあまりの間口の広さに、まだ何も書きもせぬうちから私は疲れだ。

ついに夜中にやたら酒を飲み、寝ころがって天井を見ていると、果てしもない海の中に、私の体も一部は溶けて漂っていくふうで、「人間らしさ」とはかようなものであろうかと思われ、この時はまことによい気持ちになつて寝てしまった。

ある晩、やはり酒を飲み天井を睨んでいると、一人の女の顔が浮んだ。一度だけいつしょに釣りに行つた時の彼女の顔である。

思い出された。

彼女は私の妻だが、いつしょに暮らすようになって一週間ほどたつた頃、アパートの便所からいつまでたつても出て来なかつたことがあつた。たまりかねて戸を開け、ふと見ると、突つ立つたままの彼女の足元の水洗便所が、今にも溢れそくなつてゐる。私は黙つて便器に肩近くまで腕を突つ込み、つまつたものを引き出した。用を足したあと、彼女の捨てたものがつまつたにちがいなかつた。

その時の彼女の一瞬の表情にも、軽くからかつたりはできないような、あるひどく真摯なものがあつた。これは明らかに彼女の不注意であつたが、実は彼女はほとんどへまをしない女である。黙つてやるべきことをやり、暇ができれば本を読むか寝てゐる。十年を越える二人の暮らしの中で、私のがしかの役に立つたのは、あの時だけではないか——。

いささか撫然たる思いで彼女のことを考えていると、会えば二人で酒ばかり飲んでいた女のことを思い出した。彼女ることは、私はよくわからない。たいていは私が

彼女はリールの扱い方を知らなかつた。私はまず手本を示し、次に彼女に竿を渡してその操作を教えた。彼女は楽しそうだつた。

ところが何度もやつても、前方に広がる海面におもりが飛んでいかない。ふらふらと後ろに落ちたり、すぐ眼の前の砂浜に激しい勢いで突き刺さつたり、時には横にいる私目がけて飛んできたりする。

はじめのうちは彼女も笑つていた。しかし何度も失敗の時に、彼女の美しい顔立ちが一瞬歪んだ。ばつの悪さ、口惜しさ、怒り、憎しみ——それらがごっちゃになつたような彼女の表情は、一瞬のことではあつたが、私の心に焼き付いた。

彼女は決して無器用な人ではない。彼女の勘のよさや聰明さに、私はいつも振り廻されていたし、その上美人であったからどこにいても目立つた。男友達も多かつた。釣りに連れていくというようなことしか思い付かない男は、おそらく私一人だつたろう。

——あの時のあの表情は何だつたのだろうと考えていると、それに重なるようにして、もう一人の女の表情が

喋つていて、彼女は黙つて聞くばかりであつた。しかしそれは、おそらく言いたいことがないためにそうなのでなく、むしろありすぎる結果そつた。

明け方近くなつて洗面所を掃除していると、誰かにじ

つと見られているような気がした。ふと振り向くと、座敷で寝ている彼女と眼があつた。今も、彼女のその時の表情をどう言えどよいのかわからないのだが、その時私は、なんと悲しい顔をしているのだろうと思った。

三人ともに、このようなことは、思い出したくもなく、覚えていてもらいたくもないにちがいない。しかし、私は、これらのことと、そのぶざまの故に覚えているのではない。むしろ私には、この時の彼女達ほどにいとおしく思えた彼女達は、後にも先にもなかつたと思う。

——夜中に酒を飲み天井を睨んで思い描くことがらに

は、おそらくどういう普遍性もないだろう。だから、私の中にあるこの三人の女がある時ふとあらわにした表情をもって、たいそなことを言う氣は全くない。ただ、「人間らしさ」という言葉を使うのなら、私にとっては、つたのだ。

私は、心ならずも露呈することになってしまったその人間の、弱さや暗さや悲しみに、「人間らしさ」を感じる癖があるのかもしれない。その人間のそのようなありよう、私自身を見てしまうのである。

ただ私は、弱さや暗さや悲しみをどう自覚することもなく、だらだらと垂れ流しにする、どこか弛緩した人間のありようについては、「人間らしさ」という言葉は使いたくない。おそらくこの言葉は、そのような人間のありようをも含み得るということを承知した上で、私の使い方はそうである。

彼女達の弱さや暗さや悲しみの表現は一瞬のことだった。一瞬の放心から普段の彼女達へと復元させたものは、彼女達のそれぞれにあったある種の「勝気さ」であった。しかしもかれども、彼女達の弱さや暗さや悲しみの表現は、そこらあたりにゴロゴロしているように私には思われる。「人間らしさ」というものが、もし私の思い込みのような、力を尽くして生きていこうとする人間の、ふと垣間見せる弱さや暗さや悲しみの表現だとすれば、それはそうざらにあるものではないだろう。

三人の女が今もなおそのようであるのかどうか、それは私にはわからない。それはまず彼女達自身が、自らの生を、なお「勝気さ」を失わずに生きているのかどうかにかかわっている。そしてそれはまた、私自身が、自らの生を生き抜いていこうとする勇気を持っているのかどうかにもかかわっているだろう。

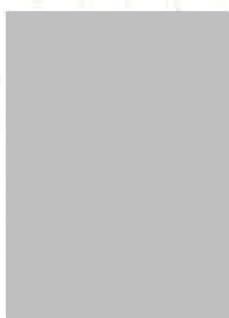
まことにものしいことだが、私の恋はそのようなしきみの中にあつたし、おそらくこれからもそうであるにちがいない。

だろう。その「勝気さ」は、多くの場合私をチクチク刺し続けたが、それある故に、あの一瞬の表情が私を引きつけたのにちがいない。

「勝気さ」というのは、私なりの思い込みでいえば、このむずかしくもしんどくもある世の中を、なんとか渡つていいこうとする気性である。彼女達が身に付けていた勘のよさやら聰明さやら、へまをやらかさない心配りやら慎重さやらは、彼女達にとってはおそらく不可欠のものであつたろう。そのように自らを鎧うことなしには、まことにこの世は生きにくくもあろう。私もまたそのようになってきて、そうでありながら、このような彼女達のありようが、時に私には無性に悲しかった。人間といふものは、強さや明るさや楽しさだけでつながるものではないだろうという思いが、私には絶えずあつた。

おそらくそのような思いよりも、私に固有のものであつたかも知れない。四歳の時のトロッコ事故で、右足をほとんど付け根から失つて以後の私の生き方が、そこにはからんでものかもしれなかつた。

弛緩した生しか持つことをしない人間の、はた迷惑な



「ローハンズプリンングスの詩人

海老原 明美

三週間のロサンジェルス滞在を終え、サンフランシスコ、デンバーを通って、コロラド州コロラドスプリングスに着いた。一九七八年八月のことであった。当時大学三年の私は、大学生の特権ともいうべき二ヶ月の夏休みを丸々利用して、アメリカに行つたのである。僕は寂しかつたが、その分、居直った強さがあつたし、学生の気楽さがあつた。日本に居ると目立つ高く大きな鼻も、こちらでは、平均値になり、「可愛い女の子」として、不思議な位大切にされた。多分現地の人は私を中学生位と思っていたのだと思う。名前位しか分らぬ Japan という東洋の国の少女は、遠来の客として迎えられた。

ロサンジェルスでホームステイの経験はあつたが、ロサンジェルスのと趣をまったく別にしたコロラドスプリングスのホームステイに私はロサンジェルスで受けたのを丸々利用して、アメリカに行つたのである。僕は寂しかつたが、その分、居直った強さがあつたし、学生の気楽さがあつた。日本に居ると目立つ高く大きな鼻も、こちらでは、平均値になり、「可愛い女の子」として、不思議な位大切にされた。多分現地の人は私を中学生位と思っていたのだと思う。名前位しか分らぬ Japan という東洋の国の少女は、遠来の客として迎えられた。

う。若い女の子の部屋らしく婦人雑誌などが置いてあつたが、それは、"Seventeen"などの白人モデルなど一人も見当らぬ、黒人一色の雑誌であった。"Black is beautiful"といつの頃からか言われ出したのか、ロサンジェルスで見かけた髪を金髪に染めた黒人女性は見られなかつた。

ディスコミュージックやソウルを肯定し、というより、彼らの生活のリズムの中に、ディスコミュージックが入り込んでおり、教会の祈りの中にさえ、エレキ・ギター やドラムを持ち込む人種。教会には莊厳と静謐しか似合わぬと信じていた私達は、雷に打たれたような気分になつた。彼らには彼らの真摯さがあった。高名な牧師の祈りは、絶叫し、体を震わせながら行なわれた。同じ「聖書」が使われているはずなのに、「体质」の違いがはつきり現われていた。

明治以降、私達を導いてくれた西洋文化が日本に透け込めたのは、その文化の中に日本人にも通じる、厳格さ、静謐、沈黙があったからではないかと思う。それがここにはまったく無かつた。そういう意味では、西洋化され

とは別のカルチャーショックを受けざるを得なかつた。

コロラドスプリングスには、空軍基地があり、空軍大リニア州の南端サンディエゴで大型の航空母艦を見て、「強い」アメリカの一面を知らされたが、コロラドスプリングスでもまた、軍事大国アメリカの別の面を知らされることになつた。(僕の旅行では行く先々で、軍事施設を見る破目に陥つた。アメリカには基地が多いのか、それとも選んだ地がたまたま基地の近所だったのか)

私達上智大生を迎えてくれたのは、コロラドスプリングスの黒人組織であつた。黒人の地位は年々向上しており、私達を招いてくれたメンバーのトップクラスは市議会議員や教師、キング牧師に次ぐという地位の牧師さんなどであつた。白人のどちらかといえば淡白で厳格なプロテストント達と接してきた私達は彼らのエネルギーにすっかり圧倒された。

私は仲間とホストファミリーの家に泊つた。ホストは小柄な黒人で四十代のようであつた。奥さんと一人暮しで、私が泊つた部屋は去年まで姪が使つていたのだとい

た私にとっての初めてのカルチャーショックであったのかもしれない。

ホストファミリーの隣人はマスさんという五十過ぎの大柄なオジさんであつた。朝起きがけにホストの家の居間でマスさんと出会つた。

「やあ、お早よう。」

と、マスさんが言つたので、こちらも返事をしたが、マスさんがホストの家に居るのにちつとも違和感がないのが、何とも不思議だつた。「勝手知つたる他人の家」とは言うものの、こちらにとつては妙な感じであつた。

マスさんは黒人に共通している陽気さがあつたが、その一方、大柄で軽くびっこをひいて歩く初老の後ろ姿は、人生の苦楽を知つている人だけがもつ暖かさがあつた。

「ワタシハ、ニポンゴヲ、ハナシマス」がマスさんの喋る唯一の日本語であつた。彼はずっと空軍で働らき、ベトナム戦争の時には何十回となく戦闘機で、コロラドスプリングスの基地からベトナムに向かつた。

マスさんは黒人特有の厚い唇で、

“Sure! ”

と相槌を打つた。「そうだとも」と訳すのだろうが、黒人としては淡々とした人だった。日本の基地に居たこと

もあり、広島や長崎にも出向いたという。彼は軍人として何人もの人を殺してきたのだろう。しかし、「原爆を落としたことはいけないことだ。」

と彼はぽつんと言つた。

「日の丸ワインはおいしかった。」

と、赤玉ポートワインのことを言って、目を細めた。

黒人達は心から親切してくれたが、その熱心さは、日本人にとては、度を超すものであつた。相手のエネルギーにすっかり押しまくられて、皆二日間でげっそりしてしまつた。

黒人から見ると、黒い髪、黒い瞳を持つ日本人は、白人よりずっと身近に感じるらしかつた。もし私達に彼らと同じような明るさと、エネルギーがあつたら、もっと

フランクな良い付合いが出来たのかかもしれない。

私達を引率してくれたフランス系カナダ人教師が、

「彼らが日本へのホームステイを希望しているが、受

け入れる気のある者はいるか?」

と訊ねた時、

「Yes」

は、私を含めて二名のみだった。フランス系カナダ人教師は日本人を妻にしていて、私達の心情を察してか、それ以上何も言わなかつた。日本人はヨーロッパ系アメリカ人以上に黒人を差別しているのかもしぬなかつた。

コロラドスプリングスからの出発の日、マスさんは静かに言つた。

「二十年後に再び会おう。その時は日の丸ワインを持って来てくれ。」

私はマスさんの髪に白いものを認めて目頭が熱くなつた。

むかしなんにもせん長

林 喜 芳

なんにも船長
いうこと機関長

こんな肩書の名刺を見せてもらったことがある。決して私がそのご仁にお逢いした訳ではない。友人の誰彼からその人の噂(うわさ)話をよく聞いたし、竹中郁さんも何かにそのことを書いて居られた。

大正の末から昭和の初めである。それは先号に書いた「赤マントの朝ヤン」を元町で見かけなくなつた頃、鈴蘭灯の下を颯爽と歩いたのがこの人である。その名、小林茂さん。清新らしい船長の制服、肩にも両袖口にも金モールの飾章がまばゆく光つて道行く人の眼を射る。もちろん帽子こそ貰祿をみせる船長のもの。威采あたりを払う姿は人びとの注意を魅かずには居なかつた。私の友人で画家の大垣泰治郎さんもそんな時、面識を得たと

言う。

お住いが大垣さんの隣町、「序に寄つてゆけ！」と誘われて案内された階上の部屋はまったく船に於ける船長室を髪飾(ほうふ)させるほどの立派さ、壁に掛けられた海図はもとより、大きな地球儀、羅針盤、舵柄から洋灯のかずかず、飾り棚には船にまつわる置物、それらに取り囲まれて豪華なソファに腰をおろして航海の話、まるで洋行気分であつたと大垣さんはおっしゃる。そこへ出されたのがまた洋酒いろいろ。残念ながら大垣さんはお酒がイケナイので画竜点睛を欠いたと大層惜しまれていた。それを聞いた私も不粹な人間で舶用機器や飾り物の名称も聞くには聞いたが健忘症のゆえにその場で忘れてしまつた。いま、これを書きかけてその雰囲気でのないのは、肝腎なモノを忘れた私の手落ちからである。階上窓外に見える遙かな海原、ただそれだけで心躍る時代であった。

ついさきごろまで、「日本少年」や「海国少年」という雑誌を見ては潜航艇(まだ一般には潜水艦といわなかつた。)での海底冒險にうつつを抜かしていたはずである。

いまのように航空機の利用はなかった。単葉または複葉の飛行機さえ実際に見ることは稀であった。従って遠隔輸送には汽船が巾（はば）を利用された。神戸港はそれゆえに日本一となつた。海外旅行といわば洋行といい、羨やましい存在であった。渡航者はアメリカ行きを除いて欧洲でも中国大陸でもすべて神戸から出港した。東京の知名芸術家も一旦、神戸に来て、ここから船に乗る。

大塚銀次郎さんのお話では、洋画家川島理一郎さんの何度目かの渡仏の時、昭和五年の初夏と聞いたが、神戸の少壯有為の画家たちと飲み歩き、飲み明かし、気がついたときにはやはや東の空は白々と爽快を迎えていた。船はといえば最早や出航してその船影も見えぬ。

しかし、その頃は良かった。神戸は良かった。早速、三宮駅（その頃は今の元町駅のところにあった）から汽車に乗りこみ、汽船を追いかけた。都合のよいことに汽船は門司港で一日停泊することになっている。乗り遅れの乗客を待つて、汽船会社にも案外、そんな配慮があったのかも知れない。

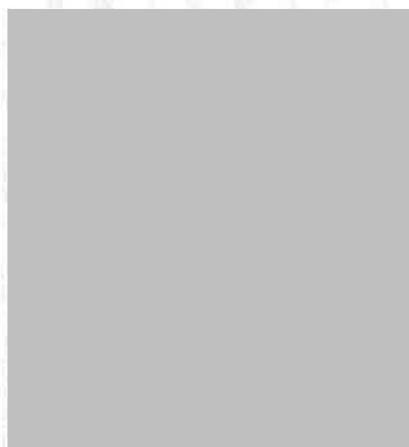
画家ばかりではない。文士も多数わが神戸港から外国

約千人が送迎デッキを埋めた」と書いてある。
また、二十九日には中国の明華（シンファ）が入港、十月七日には「北欧のスワン」の愛称をもつノルウェーの豪華客船ロイヤル・バイキング・シー（二一、八九七トン）が米人観光客三百九十三人を乗せて来る。ソ連客船ツルクニアも、ハバナのパールオブスカンジナビアもつづいて神戸入港と聞くからに、明治生まれのふるい男、私はむかしの「扇港」の文字を思いだし、出船入船に二マリとする「なんにも船長、言うこと機関長」が鈴蘭灯の下をゆうゆうと歩いている姿を空想するのである。航空機なんぞ、糞喰らえ！。

に向けて旅立つた。ダイエスト辻潤が友人に誘われて渡仏のため来神したとき、これもまた若き芸術家たちと三宮のカフェーガスあたりを飲み回り、遂にはその旅費までもつかい果し、その友人はひとりで乗船、辻潤も乗船はしたもの的小便をしただけで下船、東京へ帰つたという話は画家の飛地義郎さんから聞いた。

当時、私はまだ文学少年、活版屋の小僧で毎日が残業、月二回休日といった非文明な勤めをしていたので、耳学問だけが唯一のたのしみ、この目でついに見ることはできなかつたが、それだけに大きく胸は膨らみ、私の小さな頭イツパイになつて、貧乏とはあらゆるチャンスを失うものと思い、昼間堂々と元町を闊歩できる学生諸君を羨ましく思つた。

最近の新聞をみると「世界で四番目に大きい豪華客船、海の貴婦人の異名ある英國のオリアナ（四一、九二〇トン）が九月二十二日、オーストラリアから觀光客千五百人を乗せて神戸に入港」とか「夕方には船の照明が海面に映えてまさに『浮ぶ不夜城』、それを見んものと、地元の神戸はもとより大阪、名古屋から詰めかけたファン



神戸野球物語 [III]

—関西中学連合野球試合への遠征—

神戸商科大学教授 棚田真輔

投手 柴田 松蔵 三塁 児玉 一貫
捕手 池田 多助 右翼 後神 昇吉
遊撃 陶山 素一 左翼 中安 晃
一塁 浜岸繁太郎 中堅 大塚 正雄

二塁 泉谷 祐勝

明治34年になって、それまで自校や神戸に招いて対戦していた神戸の中等学校野球チームが、県外に遠征するようになる。その筆頭が神戸中学校で、明治34年8月、大阪堂島中学校で開かれた関西中学校連合野球試合に出かけ、

神戸中学 10×15 京都中学

神戸中学 5×10 堂島中学

で2勝。京都中学（3勝1敗）、丸亀中学（1勝2敗）、堂島中学（1勝2敗）、天王寺中学（2敗）。神戸中学の校友が『校友会誌』に

ちよろづの軍なりともことあげず

とりてきぬべき男とぞ思ふ。

と歌ったメンバーは次のとおりであった。

神戸中学 7-15 第三高等学校

午後四時試合は終了したが三高学友雑誌『嶽水』は、

「神戸軍バッチングに於ては凡てバットを振り後れし觀

あり、為に我が富田氏も其妙腕を試むるの機なく、多くP置塩氏の功名に帰しぬ。フィルディングに於てはⅡ泉谷、S陶山氏技量も熟せり、ただピッチングの二氏の技に伴はざりしを恨むのみ……」とあり校長の訓示が気にかかっていたのか振わなかつた。泉谷と陶山は共に早稲田に進学し、アメリカ遠征に加わり活躍、捕手の池田は神戸一中第二代目校長となつた人。

明治35年の三高主催のこの大会には神戸から、神戸中学校、神戸商業、関西学院が出場し次のように対戦した。

神戸商業 9×15 三重中学

神戸中学 1-18× 京都一中

関西学院 日暮引き分け 同志社

神戸中学 7-16 愛知一中

この関西学院対同志社戦は、『嶽水』によると「先づ

同志社の服装紅白のダンダラ染の佳麗なるに驚かされぬ。一戦より五戦に至るまで紅軍常に優勢なりしが、第六戦に至りアンパイラーの命によりgameは終りとなる。時

時に暮鐘霧にむせんで神陵夢よりも淡し……」で、関西学

院は6対3でリードをしていた試合であった。

この第三回大会は明治36年11月開催されたが、この大会に神戸から神戸中学・神戸商業・関西学院の外に神戸クリケットクラブ（KCC）の外人チームが出席した。

関西学院 15-12 明倫中

神戸中学 17-8 愛知一中

神戸商業 4-4 京都一中

KCC 8-10 三高

神戸のチームが大会の主力チームと対戦して善戦していることから、神戸のレベルが高かつたことがわかる。

神戸商業対京都一中戦も9回裏まで4対2でリードしていく、勝利を意識しすぎてか4個の失投が出て引き分けたものであった。

KCC対三高戦は、三高が6月に挑戦状を送つてやつと11月定期戦として成立したもので、次のようなきっかけがあった。

「神戸在留外人より成れる神戸クリケット俱乐部は、当時盛に其技を練りつつありと聞き、久しく好敵手に飢へたる選手の腕は鳴り、肉躍りて止むるに由なく、ついに

彼に向て挑戦状を送りぬ。数週にして彼の返書は来れり、曰く、「我がクラブは運動場開かざるを以て、貴意応じ難し、然れども六月ならば或は応戦するの機会あらん」と、然れども六月に於ては、我部は到底戦ふ能はざるを以て、

ついに全く対外人仕合を断念するの止むを得ざるに至れり。爾來年々我部は彼に交渉せしと雖ども、彼言を左右に托して応ぜず、空しく腕を摩して時の至るを待てり。

然るに彼充分なる練習を積みたるや、九月十八日突然我に戦を挑み来れり。曰く、「我クラブ選手は来る廿六日御校々庭に於て共に其技を戦はさん事を欲す」と、嗚呼つに待ち焦れたる好機会は来れるなり。然れども翻て我が部を見ればさきには老練にして有力なる数選手を大学に送り、今学年諸種の事情ありて地盤未だ固定せず、加

ふるに数選手尚帰省中にて、到底一週間の後に戦ふべくもあらざれば、止むを得ず我が部は十月中旬以後に戦はん事を申送れり、然るに一週間を経るも何等の返書に接せず、即ち九月三十日再び書を発して彼の回答を促せり。

数日にして彼の返書は来りぬ。曰く、「我がクラブは貴意に応じ十月下旬御校に於て見えん」と、ここに於て我部

は先輩大神氏に全般の事を依頼せり、よりて大神氏神戸に至り種々交渉の結果、十一月三日天長の佳節をトとし、我が校庭に戦ふに決し、且つ毎歲春秋二回交代往復して仕合せん事を約せり」

「嶽水」は「観覧者の今度の如く多数であった事は恐らく我校庭では初めてだ。或る新聞には六万と書いてあつたが、それほどではなくとも万で以て数ふる事は能い出た……これで敗けでもしたら、勝ったから選手の鼻もそれだけ高い道理だ、万歳。」と喜んだが三高チームのトップバッターで二塁手の松田範房は神戸中学野球部のOBで、神戸中学時代にKCCとは数回対戦して、事情に明るく、彼をトップに起用するなどして勝利を期している。

三高主催の野球試合は明治40年からは、近府県総合野球大会と称し、明治45年まで開催された。この野球大会が関西の中学校における野球に大きな目標を与え、大正四年に豊中で始まる全国中等学校優勝野球大会の前身的役割を果したのであり、高く評価されるべき大会であるにもかかわらず、記録や大会に触れた資料はきわめて少

い。

大会が京都で開催されたことから毎年神戸のチームが出席してきたが、明治30年代までは強力チームとして堂堂の勝利をおさめ、他府県の中学チームの挑戦を受ける立場になつた。特に神戸中学の活躍が目ざましく大会の中心的チームであった。また神戸商業も毎年チームを送り善戦していたが、明治40年に入ると、この神戸中学・神戸商業ともにこの大会では後退して、大差で敗れることが多くなつていく。因に明治40年の両校チームの成績をみると次のようになる。

神戸商業 0-12× 明倫中

神戸中学 6-19× 愛知一中

愛知一中はこの試合の前日京都一中に4-10で敗れており、投手の林鎮二是四球16、安打8本を与えた大差で

敗れた。一方神戸商業は菅瀬一馬投手が三振を14もとつて好投したが、チームの打撃が振わず0-12×で敗れた。

この菅瀬一馬と右翼手の高浜茂が共に慶應義塾に進み、アメリカ遠征、(菅瀬、大正2・3年)・(高浜、大正4年)に主将となつてチームをまとめた。彼らは後に神戸

野球倶楽部の主力選手となるが、菅瀬はそのエースとして活躍。高浜は、兄の徳一(明治41年慶應主将)、弟の益雄(慶應野球選手)と三人兄弟が、共に慶應野球部で活躍した事が有名。

三高は全国高等野球大会が開始される明治45年に、この近府県総合野球大会を中止した。明治期の神戸における中等学校野球界にあって、神戸中学・神戸商業そして関西学院等が三高野球大会でその実力を高く評価され注目されるにいたって、新設中学校でも野球チームが編成され、校内大会を経て対校戦へとエキサイトしていく。しかし、全県や神戸市内のチームを対象とした野球大会が開かれたのはずっと遅れ、大正期に入つてからであつた。

(つづく)

ぶつく・えんど

休日になると、子供たちがコミック誌のコーナーや、

児童書のコーナーで座りこんで本を読んでいる。本屋の

目から見ると、手放しで喜べない事ではあるが、僕自

身がそういう少年だったことを思うと、すこしごらいの

ことは認めてあげたいという気持ちになる。第一、その

真剣な目が何よりも良い。

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

二丁目 530 大阪市北区末広町

網羅されている。定価は五〇〇円、送料は三〇〇円です。
お申しこみ、お問い合わせは大阪ボランティア協会まで。

大阪ボランティア協会

(電)

ボランティア活動の最新のガイドブックが発行された。大阪ボランティア協会、大阪府社会福祉協議会、大阪市社会福祉協議会の共編による『ボランティア・ハンドブック』がその本。九月二十一日付読売新聞に記事が出ている。記事によると、ボランティア活動をしたいのだが、どこで、どんなことをしていいのかわからないという人のための本で、四十六年の初版以来、今回が五回目の改訂版だという。大阪にある約七百のボランティアグループの紹介、施設、行政機関、病院、学校などが地区別に

前号で読書人向けの雑誌「ブックマン」が創刊されたことを書いたが、もう一誌紹介することにしよう。このほど第二号が発行された「読書マガジン」がその雑誌。発行所はジャックボックス。目次をひろうと、日本のS.F.ベスト一〇〇と、飽食時代の「食の本」ガイドの二本がメイン。S.F.ベスト一〇〇の方は、S.F.界で注目されている新井素子さんがアンケートの結果についてしゃべっている。「食の本」の方は切り口も良いし、口あたりも悪くない。企業のつくった料理本を書きこんであるところが、グー。当店に入荷していますので手にとってご覧ください。第三号の発行は来年一月二十日の予定。

*

*

*

地方史研究の雑誌には長い歴史を持つ名著出版発行の「歴史手帖」があるが、十月にこの分野に新しい雑誌が登場した。日本郷土史刊行会発行、和光出版発売の「郷土史展望」だ。創刊号は「磨崖仏」を特集。次号は「港・海上回路」「かくれキリシタン」を特集するという。

創刊号は入荷したが売り切れ。ご入用の方は、当店にご注文いただか、左記発売元までお申し込みください。

和光出版

二丁目 東京都杉並区松ノ木

(電)

*

*

*

声の出る「読書器」が筑波研究学園都市の工業技術院製品科学研究所で開発された。毎日新聞の十月五日付にその記事が出ている。記事によると、この機械はまだ試作段階だが、読みとるスピードは一字あたり〇・六秒とまずまずのスピードで、これまで点字本で人に読んでもらう以外には活字メディアに親しむ機会を持てなかつた目の不自由な人にとつて、かけがえのない、伴侶にな

郷土誌の窓

△論文▽

新田開発村の皮多——旧明石郡領新田組

を中心として—— 阿部 真琴

封建制的賤民支配の成立—— 摂津風呂谷

皮田集落に即して—— のびしょうじ

みこしかつぎ闘争と自由民権 上野祐一良

△資料紹介▽

風呂谷関係文書——山林出入関係—— 前 圭一

神戸区議事録／湊東区議事録 足立 雅子

* * *

山田正雄さんの新著がこのほど入荷した。『近世播磨

の農民像——黍田庄村屋佐七郎の生涯——』(三、〇〇

〇円)がその本だ。山田さんは二年前に『播州黍田村農

民の歴史』を発表されて、神戸史学会賞・小野市文化功

労賞を受賞している。地味な研究書でありながら、一

書店でも好評を博した一冊だった。今回の新著は、言つ

てみれば前著をバツクにしながら具体的に江戸期の農民

像を浮き彫りにした読みものといつて良い。一人の人物

を通して、江戸時代というものの、封建制度というものを

書き込んだ農民を主人公にした歴史小説である。当店にて販売しています。

＊＊＊

「神戸生田神社秋祭と出し店」「神戸長田神社の追儺」など神戸関係の論文・資料も数多い。全二巻分売不可。摘要一八、五〇〇円。当店にてご覧いただけます。

＊＊＊

兵庫県部落問題研究所が発行している「紀要・部落問題論究」の第七号が九月末に入荷した。特集は「神戸の部落史研究」で、論文三本と、資料紹介二件より構成。タイトルは次の通り。

＊＊＊

新聞の広告でご存知の方も多いだろうが、神戸新聞出版センターから、来年九月下旬に『兵庫県大百科事典』(全二巻)が刊行されることになった。十月一日からその予約受付が開始された。この本は兵庫県で初めての『県域百科事典』を目指すもので、その完成が注目されている。三十二の分野で一三〇〇人以上の執筆陣を動員して現在製作の途上にある。写真・図版・図表を六〇〇〇点収録するというから、並大抵の作業ではない。現在日本の各県で刊行されている百科事典をはるかにしのぐ質量となっている。類書はありえないし、予約分のみの出版だから「欲しいな」と思う人は予約されるのが確実な入手法だ。定価は四万九〇〇〇円だが予約期間中(十月一日から翌年三月三十一日)は四万四〇〇〇円。当店でも予約を受けつけています。期間内にお申し込み下さい。

＊＊＊

交通公社がシリーズで刊行している『航空写真地図』というのがある。このシリーズの七巻目が神戸で、九月下旬に出来あがって届いた。この二年のうちに兵庫県域をカバーした航空写真の本が二冊刊行されているが、共に広域で、高価だった。この本は神戸を中心に、加古川、明石、西宮、宝塚、芦屋、川西、伊丹、尼崎の市街地を撮影している。気楽に楽しめるのが何よりも良い。写真是昭和五十六年十一月から十二月にかけて撮られたもので山も海も緑が濃い。住宅地が中心になつてないので、山や川や池を楽しむ分にはもの足りない。けれども、二、八〇〇円で見ることができる空からの景観、決して高くはないといえそうだ。

＊＊＊

航空写真といえば、他にも紹介したい本がある。十一月上旬に刊行予定の『航空写真集・大阪を翔ぶ』(定価一五、〇〇〇円・十月末日まで一三、〇〇〇円)がその一冊。大阪新聞社の製作になるもので、空から大阪の素顔をさぐろうとするもの。大阪市と大阪府下を広く收めている。

神戸に立ちかえると、月刊で出ている「市民のグラフ・こうべ」（一二〇号・一二一號）が、神戸空中散歩（上）（下）の特集を組んでいて、値段は各二〇円と安いが、これがなかなか見のがせない。撮影距離が短いので迫力のある写真になっている。そういえば、前号は神戸の池の特集で、これも見ごたえがあった。

* * *

毎日新聞に小さく記事が出ていたが、外国の船の船員さん向けに英文の「神戸ダウンタウンマップ」ができたという。早速、発行元の神戸港振興協会に電話をして届けていただいた。見てみると、この英文地図は三宮から元町にかけてのハバー・バブ・レストランとハショッピングストアをかきこんだB4判大の一枚もので、重宝しそうだ。海外の船員や旅行者に喜ばれることだろう。

* * *

神戸新聞九月十七日付の記事によると、尼崎日朝問題研究会が三年前に訪ねた北海道での朝鮮人、中国人強制連行の記録を十月中旬に刊行する予定という。同研究会は七年前に結成され、尼崎朝鮮初中級学校の朴允圭（パク

・ユンギュ）教諭らとともに日朝古代史を研究したり、市民らを対象に朝鮮に関する映画を上映するなどの活動を続いているが、三年前に強制連行の実態を探るツアーを企画。この時、三人の朝鮮半島出身者と直接会い、強制連行や労働状況などについて詳しく取材。強制連行とそれに続く強制労働の過酷で生々しい証言が告発されることになる。本はB5判九十九ページで十月末に刊行の予定。

* * *

兵庫県立歴史博物館が九月に完成した。場所は姫路城の特別史跡地内で、歴史博物館としては全国で二番目の規模。神戸新聞九月十六日付記事によると、常設展示室四室、特別展示室、ビデオテープ室、体験学習室などがあり、延べ面積は七五〇〇平方メートル。開館は来年四月だが、九月二十五日から十月三日まで「完工記念展」が催された。開館後は、播磨、摂津、但馬、丹波、淡路の「五国」からなる「兵庫の歴史」、築城の技術や日本の城、世界の城を比較した「姫路城のすべて」、県下の祭りや年中行事など生活文化を集めた「風土に生きる」のテーマになる。

マで常設展示される。収蔵品は、県民から寄せられた約五〇〇〇点をはじめ、古墳の出土品、購入した淡路人形、陶器、武具、古文書などすでに一万三百二十八点が集まっている。

* * *

「季刊・河」の二十三号が届いた。目次を紹介することにする。

- 近世加古川における滝野船座成立の
私的考察 野川 至
○ヤマトタケルについて 玉岡松一郎
○多可郡における山田穂の普及 脇坂 俊夫
○播磨・西播の計画古道と条里（下） 吉本 昌弘
○河を遡行した人びと 国領 駿
○郷土文化学会と浅田先生 神吉 康雄
○私の海藻往来（1） 内海 敏春
○稻美町史の刊行に憶う 清水 潤三
となっている。同誌は当店でお取り扱いしていますので、ご希望の方は郷土の本コーナでご覧の上、お求め下さい。

海文堂案内版

亜紀書房、風媒社、現代ジャーナリズム出版会、技術と人間、せりか書房、社会評論社、新泉社、創樹社、拓植書房、の九社。九社合同で師走のブックプラザを飾ります。

十二月十六日から三十一日までは、第六回・現代史出

版会の本を展示します。ホネのある一冊一冊に思いをこめてお届けします。

★十一月七日の日曜日に小坂明子さんのサイン会を開催しました。このサイン会は小坂さんの本『あきらめないで』(双葉社刊)の発行を記念しておこなったものです。当日ご来店できなかつた方でご希望のかたは少部数ですがサイン本がございます。ご案内コーナーにお問い合わせください。

★ブックプラザでは、現在家の光協会の本を一堂に集めて展示していますが、十六日から三十日までは「現在に伝わる大衆芸能の世界」という名で、庶民の間で親しまれてきた歌舞伎、能、狂言、落語、漫才、大道芸、サーカス、香具師の本などを展示いたします。また、同時に地方小出版流通センターが作成した大衆芸能のブックリストを販売します。定価は300円です。

十二月一日から十五日までは『出版社別ブックフェア』の第五回、NRの会の本を展示します。NRの会の正式名称は、NR出版協同組合で、加盟出版社は

★階の新書ゾーンでは、十一月初めから約一ヵ月間『新書で学ぶ英会話と翻訳』ミニフェアを予定しています。点数は約30点。よく読まれている本を中心に選びました。ぜひお立ち寄りください。

★二階ギャラリーでは、現代メキシコ美術界の巨匠・ルフィーノ・タマヨの最新作・エッティングを集めた『ルフィーノ・タマヨ特別企画展』を十一月一日から十四日の日曜日まで開催いたします。一九八〇年の作品で十五枚シリーズ(九九枚刷り・サイズ七六×五六センチ)を中心二〇点展示します。ご期待ください。

★昭和五十八年版の日記・手帳・暦・カレンダー類が次次と入荷してきます。十一月に入つてからは店外で

展示販売する予定です。お早目にお買い求めください。

なお、北野ランプ博物館が作成した、素的なランプの写真の一枚ものカレンダーを販売しています。インテリアとしても楽しめる、ムードのあるカレンダーです。売価は900円。二階ギャラリーにてお求めください。

★大学の願書は二階学習参考書売場でお取り扱いしています。入荷の有無などについては同売り場までお気軽にお問い合わせください。

★十二月になると、書店の店頭も一段とにぎやかになります。婦人雑誌を中心に雑誌の新年号が行く年をせかすかのように、高くつみあげられます。

クリスマス・年末に本や図書券をプレゼントされる方も多いことと思います。各レジスターではプレゼント用包装を承っておりますので、お気軽に「プレゼントです」とお申しつけ下さい。

